

フルベッキ考

「フルベッキ写真」検証

資料に残されていない一枚の写真が実証する歴史的背景(大意)

徳川末期の幕府は第一・第二次征長の件、参勤交代復帰の件、長州(山口県)に居る京都の五公卿(東久世通禧・**三条實美**・三条西季知・壬生基修・四条隆謙)を江戸に移送する件等々幕府は幕命を発令した。

薩摩藩の最高司令官**西郷南洲翁**は熟慮し、この五卿は王政復古に重要な人物であり、朝廷に復職させ、我が日本の統一をしなければならないとして、これら事件に対処すべく、新たに各藩の勤王党の連合を計画し、長崎に集結をかけるため大久保利通・吉井友実等がアドバンスパーティとして遊説をはかり、集結場所を決めるため、慶応元年一月二十七日、大久保等は長崎に上陸した。

この頃、**長州から福岡の太宰府に移され公卿**は、ふたたびこの公卿の冷遇が鹿児島にいた西郷翁に伝わり、翁等一行は二月中旬鹿児島を海路にて出航し、長崎を経て太宰府に着く。当時、薩摩の武士達は長州に直行する時は鹿児島から長崎港と平戸の前を通り、佐賀沖を経て太宰府・長州と海路にて行き来していた。

慶応元年二月中旬から三月十八日までの間に集結をかけられた各藩の勤王党は、西郷南州翁および勝海舟等とともに世界の情勢に明るいフルベッキ博士を訪問した。すでに門下生となった志士達と、我が日本の統一をどうしたら良いか、王政復古とは何か、王政復古後に何が来るかをフルベッキ博士を交え、相互して議論し合った。

この写真の中に、薩摩の欧州行き留学生の一部の者もおり、また、済美館の前身、仮語学所が慶応元年正月、江戸町に建った記念とが重なり合い、**コンセンサスのもとに上野彦馬写真スタジオ**でフルベッキ博士の子供も交え和やかな雰囲気で記念撮影された。

明治二十八年にこの写真が出現したが、**何故に西郷翁・勝海舟等が写されている事を公表できなかったのか**、この写真を「太陽」に掲載した戸川残花も言っているように、**慶応年間の事跡は政界の一部分の勢力に圧迫を受け、やむなく佐賀藩の学生達として、事件があった年代順に示唆で公表した**。このため現在までに分からなかったのである。

この写真はフルベッキ博士が宗教記録として所持し、絶対に手放さなかったものであるが、明治二十年代の宗教家で歴史家でもある戸川残花の強い要請により借り受けたものである。